

特集：ミュンヘン・ハイエンドショー 2017

## ミュンヘン・ハイエンド・訪問記

CS ポート株式会社

技術顧問 高松 重治

欧州へは今は懐かしいアンカレッジ経由（ソヴィエト体制で領空通過ができなかった）時代から訪れてはいたものの、何とミュンヘン訪問は初めてである。筆者は新会社にて広報活動も担当しているが、欧州への合理的な進出方法を模索する一環としての訪問である。よって実際の展示の品々の紹介などは他の執筆者にお任せすることとし、別の観点からの感想などを記する。

米国 CES ラスベガスは 2001 年 9 月 11 日の NY, WTC ビル崩壊後の 2002 年 1 月は出展していた The Venetian は惨憺たる状態で、盛況だった前年の凡そ 20%にも満たなかったかと記憶している。それ以降少しは増えたものの、これを契機に斬滅し High End Audio Show の主導はミュンヘンに移行していった。ハイエンド・オーディオの先達は異口同音にして進出なら「先ずミュンヘンです」と仰言られている。普段の日本のショーでも中々逢えない同業者に、ここミュンヘンで出会うという有様。それにしても部品を含むオーディオ関連メーカーが実に多い事に感心した。

会場で配られていた小冊子「HIGH END magazin」によれば、小間(オープンスペースと音を出せる部屋を含む)の数は凡そ 370 余、参加社(重複記載含み、また記載されていない代理店などもあった)は 1,012 社(おそらく全世界)に及んだ。そして主催事務局に精通されている森 芳久本誌編集委員経由で空きなどを伺ったが、待ちの会社が多数あるとの事であった。



写真 1：会場の入り口にあるお馴染みの広告塔

その昔、東京晴海で開催されたオーディオ・フェアはL館、R館を構え、その間にはクレーンで吊り下げられた巨大なセンタースピーカー（三菱製 80cm を実際に大型アンプでドライブしていた）があり、オーディオの栄華を極めていた。そして併催されていた日本電子機械工業会（EIAJ 現在では JEITA）の電子部門の部品ショーへは、設計部門の人々のパーツ選びには欠かせないものであった。

さてミュンヘンのショーに戻すが、オーディオ機器の展示はショーの発祥からの参加メーカーが広い場所を占有しているのは、日本のショーでも同じ。そして殆どのメーカーは数社単位での集合展示である。これは欧州（ドイツのみかは不明）の代理店（代理商）単位の展示のようである。欧州における代理商は販路開拓には欠かせない存在なのである。

市場開拓・拡大には\*1

- ① 直接販売
- ② 現地販売要員の雇用
- ③ **代理商の委託**
- ④ 代理店や輸入業者への委託
- ⑤ 商社の利用
- ⑥ ジョイント・ベンチャーの設立
- ⑦ ライセンス供与
- ⑧ フランチャイズ契約
- ⑨ 生産拠点／現地販売店拠点の設立

などが考えられる。日本では馴染みがない代理商（英：Commercial Agency, 独：Handelsvertreter）であるが、費用とリスクを軽減し、現地の情報と幅広いコネクションを持つ代理商が魅力的なことは、ミュンヘンのショーの複数展示が物語っていると思われる。

欧州に限らず安全規格等で輸入制限されている各国への安全規格取得でも、代理商の利用は有利と思われる。但し全てを任せるのではなく、情報取得はある程度自分たちの手で得る方が大きな間違いをせず済むことは明らかである。

ハイレゾのみならずアナログ関係が賑やかなのは、日本より海外の方が以前でもその比率が高いように思われる。それはアナログプレーヤーが至るところに展示が見られ、その容姿たるやアナログの本物志向の結果の現れだろうか。現在の機械加工の精度向上やアンプ・スピーカーの性能向上などから、50年前に録音されたものを、今の機器で当時の演奏者にお聴きかせすることが出来たならば、その音の良さにきっと驚嘆されたに違いない。

最近アナログがマスコミなどに取り上げられ、賑やかであるとよく言われるが、決して懐古趣味ではなく何も「最近」の傾向ではない。筆者が前の会社で米国 CES に出展していた 10 年ほど前には、ドイツの LP プレイヤーメーカー、トランスローター社との同一ブース展示であった。同社創業はかれこれ 40 年になるが、同社創業者のレイカー氏はレコードの音溝からの正確な音のピックアップに固執し現在に至っている。

その集大成とした超弩級機(写真 1)ARTUS(€160,000-)だ。もちろんハイエンド機のみならず、これらのエッセンスを入れ込んであるローコスト機にも力を入れていることは言うまでもない(写真 2)。他にも CLEARAUDIO 社(写真 3)の超弩級の数々や Acoustic Signature 社 INVICTUS(写真 4)など多数の LP プレーヤーが展示されていた。ひところの青色 LED でライトアップされたアクリル製の超厚プラッターは影を潜め、いずれも分厚いアルミニウムで仕上げられているのが主流である。



写真 2 : TRANSROTAR ARTUS



写真 3 : TRANSROTAR ZET-1



写真 4 : CLEARAUDIO 社ブース

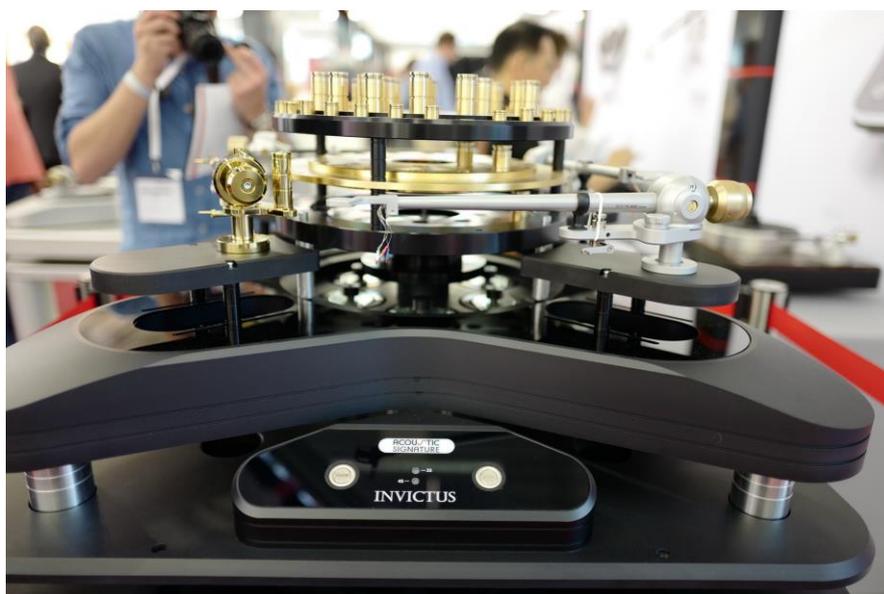


写真 5 : Acoustic Signature 社 INVICTUS

それはさておき、一昨年の音展に来日され慶應義塾大学軽音楽部と記念演奏を行った Lyn Stanley さんが最新録音「THE MOONLIGHT SESSIONS Vol.1」を発表し特別記念盤 100 枚を日本の会社のブースで試聴即売会を行った。Lyn Stanley レーベルは当初より AL SCHMITT 氏など有名な録音エンジニアを起用、もちろんアナログ録音だ。しかも高域再生に真価を発揮する 45 回転の重量盤である。Reel to Reel (所謂 2 トラ 38 テープ)も発売すると聞いている。

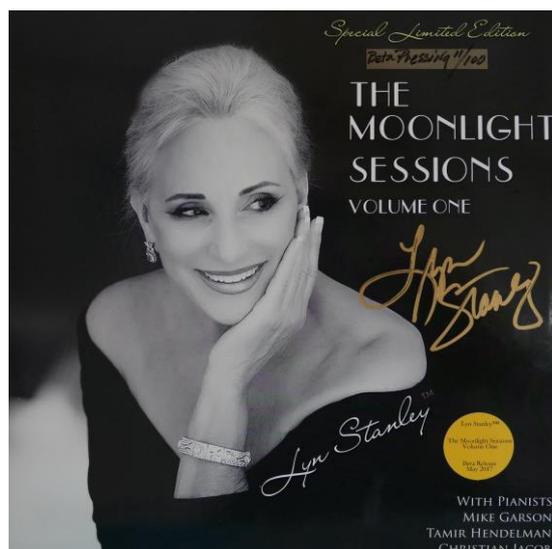
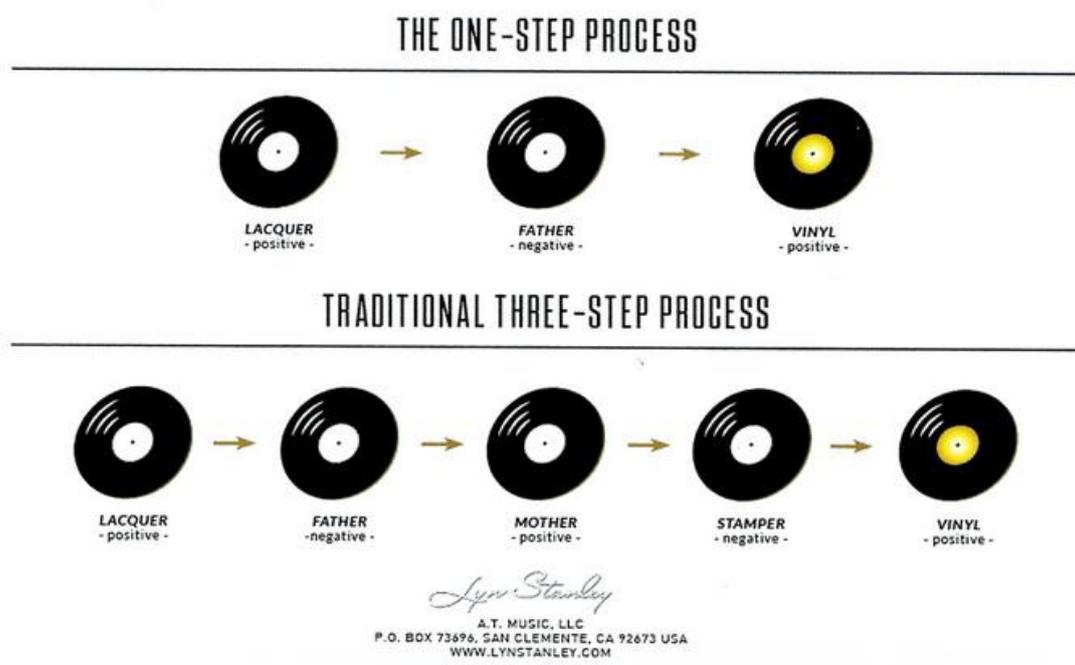


写真 6：通し番号 11/100 番のジャケット

これはさらに図示するような音質向上に努めた方法で作られている。従来のプロセスのような、ラッカー盤→ファーザー盤→マザー盤→スタンパー盤→ビニール盤(レコード盤)ではなく、マザーとスタンパーを省略した「ワンステップ・プロセス」と称したもので制作されている。<sup>\*2</sup>

つまりカッティングマシンで刻んだラッカー盤に近い瑞々しい音質に仕上がっているのである。



図：ワンステップ・プロセスと従来のスリーステップ・プロセス <sup>\*2</sup>

さて日本では 35 年前 CD デジタルオーディオに席卷され影を潜めたビニールディスクいわゆる LP の製造は東洋化成一社であったが、今年になってソニー・ミュージックエンターテイメント(SME)社がスタジオにアナログ盤カッティングマシンを、そしてプレス機も導入したという朗報が入った。この英断には拍手を送りたい。LP 音源の殆どがレコード愛好家所有で賄われていたものが、僅かではあるが最新式の製造機で市場供給が行われる。音の良い音源に大いに期待するところである。

新技術で駆逐された古い技術が改めて見直されると言う極めて稀な事件ではあるが、果たして「古い技術」と言えたのであろうか。「新技術」と称して市場(ユーザー)を正しい方向に導いていたのであろうか。ある音響関係者は「CD-DA がもう 10 年遅く出て来て欲しかった」と言われた事を改めて思い出す。

#### 参考文献

- \*1 <http://www.ichgmbh.com/whats-new/2013/07/16/167>  
欧州における代理商の存在と役割—販路開拓の手掛かりとなるか
- \*2 Lyn Stanley [THE MOONLIGHT SESSIONS VOLUME ONE]

#### ■筆者紹介



高松 重治  
1944 年東京生まれ  
1966 年トリオ株式会社入社  
1972 年ケンソニック株式会社創業に参画  
2014 年日本オーディオ協会諮問委員  
2016 年 CS ポート株式会社技術顧問